英語の中間構文
── 語彙概念構造に基づく分析 ──

English Middle Construction
── An analysis based on Lexical Conceptual Structures ──

柘　植　美　波

Minami TSUGE

1.　はじめに

英語の中間構文（middle construction）とは（1）で示されるように，動詞が他動詞であるのにも関わらず，主語は行為を行う動作主でなく，動作を受ける対象で表される表現である。

（1）That article reads easily.

（Randall（2010: 47））

（1）は「あの記事は簡単に読める」という解釈を持つ。このような表現はあまり馴染みがないように思われるが，広告文などでよく用いられる。（1）のような中間構文を語彙概念構造，すなわち，意味構造を用いて分析すると，多くの興味ある特徴が明らかにされる。

本稿の目的は，中間構文に関する先行研究，とりわけ語彙概念構造に基づく分析を参考に，その構文の特徴を分析するということ，加えて，事実観察を通して先行研究の問題点について議論していくということである。本稿の構成は以下の通りである。第2節では中間構文の特徴や同表現の語彙概念構造，中間構文に関連する動詞構文についての先行研究を概観する。第3節では先行研究で明らかにされている中間構文の特徴や語彙概念構造に関する問題点や提案を述べ，第4節では結論を述べる。

2.　先行研究

中間構文はこれまで幅広く研究され，様々な観点から分析されている。本節では，中間構文に関する先行研究を紹介する。まず2.1節で，従来の研究で明かされてきた中間構文の特徴についてまとめる。2.2節では，影山（1998）が提示する語彙概念構造のスキーマ及び中間構文を他の構文と比較した分析について概観する。2.3節では，Randall（2011）による中間動詞の語彙概念構造の分析について取り挙げる。最後に2.4節では，2.1節から2.3節まで見てきた一連の先行研究のポイントをまとめ，それらを比較・検討する。

2.1.　中間構文の特徴

本節では従来の先行研究で明かされてきた中間構文の特徴を幾つか見ていく[1)]。まず中間構文に関する主要な特性を取り挙げ，次に中間構文に見られるその他の性質を概観する。さらに，先行分析の中で意見が分かれ，はっきりとしない点についてまとめる。

2.1.1.　中間構文の代表的な特徴

中間構文に関して，多くの研究者が述べている重要な特徴は大きく3つある。1つ目は，中間構文は能格構文と受動構文と似ていると

いうことである[2)]。中間構文の特徴を説明する時，他の動詞構文と比較されることが多いが，その比較対象の構文の代表例が能格構文と受動構文である。この点はJespersen（1949），Keyser and Roeper（1984），Visser（1984），Fellbaum（1985），Fagan（1988），Levin（1993），そしてGarcía de la Maza（2011）で取り挙げられ，多くの研究で述べられている[3)]。例えば，（2）のような中間構文，（3）のような能格構文，そして（4）のような受動構文がある。

（2）The book reads easily.

（García de la Maza（2011: 161））

（3）The cup broke.

（García de la Maza（2011: 161））

（4）The man has been shot.

（García de la Maza（2011: 161））

（2）から（4）を比較すると，3種類の構文の全てが表面上自動詞であり，1つの項を取ることがわかる。（2）は「その本は読みやすい」ということ，（3）は「コップが割れた」ということ，そして（4）は「その男性は撃たれた」という意味を表す。かくして意味役割に着目すると，3種類ともに主語の θ-roleはtheme（主題）あるいはpatient（被動者）である（Keyser and Roeper 1984，Fellbaum 1985，García de la Maza 2011）。従って中間構文とは，能格構文のように1つの項を取る自動詞用法で表され，能動の形を持つが，受動の意味を持つという構文である[4)]。中間構文は能格構文と受動構文の中間の性質を持つということから，中間構文と名付けられた。

2つ目は，中間構文には潜在的動作主（以下，implicit agent）が含意されるということである。上記の（2）の主語は「読む」という行為をする動作主でなく，動作を受ける対象の「本」である。読む人は表現されていないが，読む人を表す動作主は不特定であるため，表現されないと考えられている。この点に関しては，Jespersen（1949），Keyser and Roeper（1984），Fellbaum（1985），Fagan（1988），Levin（1993），そしてGarcía de la Maza（2011）の研究で明らかにされ，中間構文の重要な特徴であると考えられている[5)]。

3つ目の特徴は，中間構文の動詞（middle verb，以下，中間動詞）は通常副詞と共起するということである。これに関してもJespersen（1949），Keyser and Roeper（1984），Visser（1984），Fellbaum（1985），Fagan（1988），Levin（1993），そしてGarcía de la Maza（2011）など多くの研究で述べられている。中間構文の副詞に関しては主にFellbaum（1985）が分析し，同表現に通常使われる副詞は上述の（1）や（2）に示したように，*easily* などの“facility”adverbであると分析される。これは，ある特徴が theme あるいは patient に原因があるというものであり，その行為自体がどのように行われるのかを示す。

（5）These chairs fold up easily.

（Fellbaum（1985: 24））

（5）では畳みやすいという特性がagentの人間ではなく，patientの椅子にあるということを示す。ところが，中間構文で現れない副詞もあるとFellbaum（1985）は述べ，（6）のように例証される。

（6）*This dog food cuts and chews slowly.

（Fellbaum（1985: 27））

（6）の副詞 *slowly* は“positing a certain trait in the agent”adverbと呼ばれ，agentがどのような人でどのようにドッグフードを切って噛むのかを指定する。副詞によって表現された性格をagentが持っているということを表すようなもの，つまりagent指向の副詞は中間構文では使われず，（6）のような文が成立しないとFellbaum（1985）は説明する[6)]。以上のように，中間動詞は副詞と共起するが，全て

の副詞が中間構文で使われるとは限らない。

以上で述べたように，中間構文の典型的な特徴は次の3点である。第1に1つの項を取る自動詞用法で表され，受身を表すため，能格構文と受動構文とよく似ているということが挙げられる。第2にimplicit agentが含意され，第3に通常副詞と共起するということが重要な特性である。

2.1.2.　その他の特徴

2.1.1節で見た3つの主要な特徴の他にも，中間構文の特徴として考えられるものが幾つかある。本節では，2件以上の先行研究が指摘している中間構文の特徴について以下の3点を加える。

まず，中間構文は総称的な文（generic sentence）のみで使われ，特定の事象（event）を示すことができない。これは中間動詞が（7a）のような命令文や（7b）のような進行形の文で起こることができないということから指摘される[7)]。

（7）a.*Kill，chicken!

（Keyser and Roeper（1984: 384））

b.*Chickens are killing.

（Keyser and Roeper（1984: 385））

この特徴は動詞 *know* のような状態動詞（stative verb）でも見られる。（8）が示すように，状態動詞 *know*も進行形や命令形として現れることができない。

（8）a.*John is knowing the answer.

b.*Know the answer，John!

（Keyser and Roeper（1984: 385））

（7）と（8）より，中間動詞は状態動詞と同じ特性を持つということが確認できる。これはKeyser and Roeper（1984）とFellbaum（1985）が分析している。

加えて，中間構文は主語の特質，つまり，状態（state）を示すということがFagan（1988）とGarcía de la Maza（2011）によって指摘されている。これは，ある時に起こった特定の出来事を記述するのではなく，ある物の特定の特徴を示す。（9a）はagentが明記されている能動文であり，（9b）は中間構文である。

（9）a. My grandma reads love stories.

b. Love stories read easily.

（García de la Maza（2011: 161））

（9a）は「私の祖母は love story を読む」という文であり，agent である *My grandma* によって行われる事象が表されている。一方，（9b）は事象を表す文ではない。（9b）は「love storyを読みやすくさせているのは，love storyの性質である」という解釈を持ち，主語の位置にある物の状態を表す。従って，中間構文は状態を表す構文であると分析されている。

さらに，中間構文には主語の特性の読み（property reading）が必要である。これは，主語の表す特性が動詞の表す行為の実現に責任を負うということであり，中間構文に必要な特徴であるとFellbaum（1985）やGarcía de la Maza（2011）が説明する。

（10）a.　This book reads easily.

（García de la Maza（2011: 161））

b. *This book reads.

（García de la Maza（2011: 166））

（10a）は「この本の読みやすさの責任を負うのは，この本の何らかの特徴である」ということを表している。一方，（10b）のように副詞が削除されると非文法的な文となる。（10b）は主語の特徴を解釈することができず，本のどんな特徴が読みやすい理由となるのかが想像しづらい。従って，themeまたはpatientである主語の特性が示されるということが必要である[8)]。

2.1.1節の3つの主要な特徴に加え，中間構文は基本的には総称的な文で使われ，状態を表すということ，そして主語の特性の読みが

必要であるという特徴もあるということを押さえるべきである。

2.1.3.　中間構文の論点

2.1.1節と2.1.2節のとおり，中間構文に関して6点の特徴が観察されているが，主要な論点として以下の2点を指摘したい。まず中間構文は，syntaxとlexiconのどちらで派生されるのか，またこれに関連して統語で他動詞なのか，あるいは，自動詞なのかという点である。この論点について，Keyser and Roeper（1984）とFagan（1988）が論じているが，双方の意見が対照的である。Keyser and Roeper（1984）は中間構文がsyntaxで派生され，その動詞が他動詞であると考えている。Keyser and Roeper（1984）によると，中間構文は受動構文と同様，（11）のように派生される。

（11）a. [NP，S] は θ-roleを受け取らない。
　　b. [NP，VP] はVPの中でcaseを受け取らない。

（12）NP Aux bribe bureaucrats easily.
（Keyser and Roeper（1984: 401））

まず（11）に従い，（12）の主語NPに θ-roleを与えないようにし，目的語 *bureaucrats* はVPの中で case を受け取らないようにする。そして，θ-role は動詞 *bribe* によって目的語 *bureaucrats* に与えられ，その目的語は主語の位置NPに移動する。この移動した NP *bureaucrats*は Aux（auxiliary）からcaseを受け取る。この過程より，*Bureaucrats bribe easily* という中間構文が形成される。

その一方で，Fagan（1988）は同表現がlexiconで派生され，その動詞は自動詞であると主張する。Fagan（1988）は中間構文の派生方法として，以下のような語彙規則を提案する。

（13）a. 外項に与えられる θ-roleにarb（arbitrary interpretation）を与える。
　　b. 直接的目的語 θ-roleを外在化する。

（13a）の arb とは *people in general* というような任意の解釈を持つ語句のことである。（13a）の規則より，動詞が中間構文に変形される時，動詞の外項に与えられる θ-role が任意に省略される。そして（13b）の規則を適用し，直接目的語の θ-roleが主語と連結される。動詞が他動詞から自動詞になるため，中間動詞は統語で自動詞であると主張されている。以上のように，中間構文の派生場所と中間動詞に関しては，Keyser and Roeper（1984）と Fagan（1988）以外の研究の中でも意見が分かれ，どちらの考えが適当かどうか明らかではない。同表現の派生場所をsyntaxとして考えている分析にはStroik（1992）などがあり，lexiconでの派生を仮定しているのは García de la Maza（2011） やMarelj（2004）などである。

中間構文のもう1つの論点は，同表現における副詞の有無についてである。2.1.1節で，中間構文は通常副詞が含まれるということについて取り扱い，この点に関しては多くの研究で明らかにされている。ところがFellbaum（1985）の分析によると，副詞が必要であるものもあれば，副詞が存在しなくても良いものもある。次のような例を考えよう。

（14）a. *This magazine reads.
（Fellbaum（1985: 22））
　　b. This magazine sells.
（Fellbaum（1985: 23））

（14a）は *magazine* にとって *readability* は固有のものであるという理由により，非文法的な文となる。（14b）が文法的に正しい文となるのは，*magazine* にとって *sellability* は固有のものではないからである。（14a）は「この雑誌は読める」という意味を表すが，*read*と*magazine*は固有関係にあり，結びつくものである。主語である雑誌の属性を伝えるのに，

どのように読めるのかという有益な情報を提供していない。どのように読めるのかということが示されていれば，文法的に正しい文となるが，（14a）ではそのような情報が欠如しているため，受け入れられない文となる。一方，（14b）は「この雑誌は売れる」という，*magazine*の属性を伝えるための有益な情報を述べている。雑誌の売れ行きというものは雑誌によって異なり，売れるものもあれば全く売れないものもある。*sellability*は雑誌の固有の関係にないため，どのように売れるのかを表す副詞が現れなくても雑誌に関する有益な情報を表すことになる。これより，（14b）は副詞が存在しなくても容認可能な文となる。副詞が含まれる中間構文がほとんどであるが，副詞が含まれないものもある[9)]。

その他の研究にも副詞の有無について論じている研究がある。Visser（1984）は，副詞のような限定的語句を持たない中間構文があるが，その用法は自由に使われることができないと提唱している。例えば，（15）では副詞が動詞の後に続かない場合も文法的に正しい中間構文になるが，一方（16）では副詞が欠如しているため非文法的な表現となる。

（15）　Our fleet may winter here, *clean* and *repair*.　（Visser（1984: 153））

（16）*The house *builds*.（Visser（1984: 154））

Visser（1984）によると，副詞を持たないという用法は伝統的なイディオムに限定され，自由に拡大されることができない。加えて，萱原（2006）も副詞の有無について言及し，「行為者の存在を示唆するような副詞語句が一般的には後続するが，談話上の要請により行為自体に焦点が置かれる場合は省略されることもある」（萱原（2006: 3））と述べている。

2.2.　影山（1998）

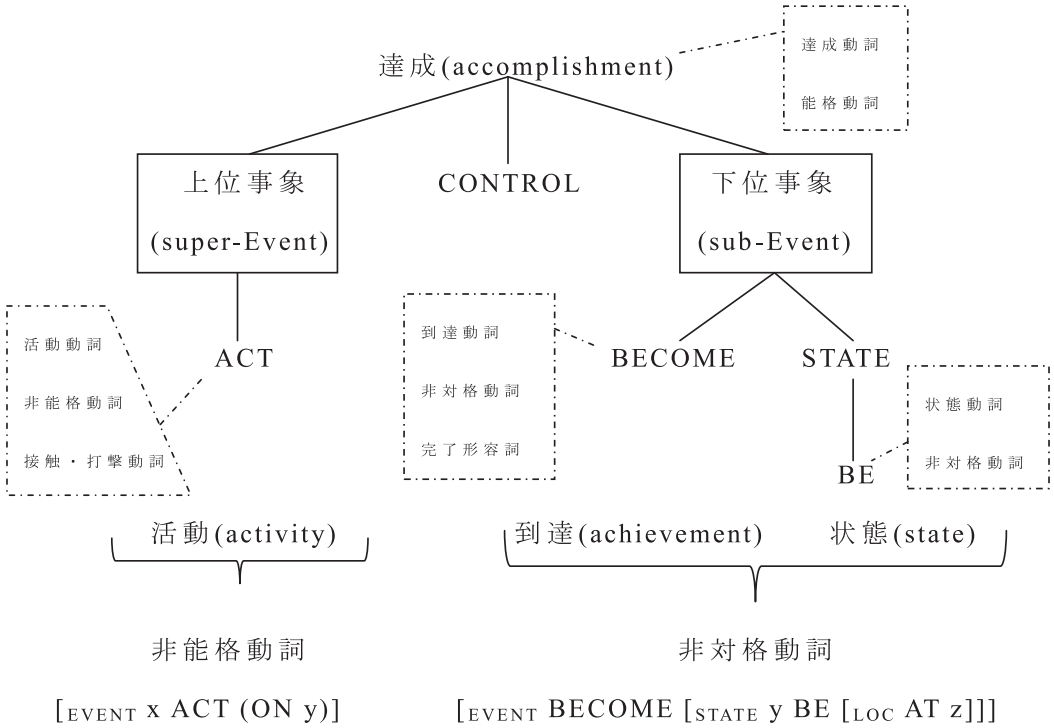
影山（1998）は主に英語と日本語を比較し，英語はスル型であり，結果重視の言語であるのに対し，日本語はナル型であり，動き重視の言語と分析している。この比較研究を軸にし，意味論を用いながら様々な動詞構文を分析している。その研究の中で，中間構文に関する分析が記述されているため，本節ではその研究について説明する。中間構文の分析に触れる前に，影山（1998）が設定した語彙概念構造の基本形と結果構文の意味構造について概観する。

2.2.1.　語彙概念構造の基本スキーマ

語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure, LCS）または概念構造（Conceptual Structure）とは，「動詞が表す概念的な意味を抽象的な述語概念で表示した構造」（影山 1998: 47）であり，基本的には意味構造のことである。以下，語彙概念構造をCSとして表す[10)]。基本的にはCSの考え方に沿って，Vendler（1957）の動詞の4分類を公式化している。Vendler（1957）によると，英語の動詞は状態（states），到達（achievements），活動（activities），達成（accomplishments）の4種類に分けられる[11)]。

影山（1998）はまず，この4種類の動詞を意味構造で表している。状態は静止状態と静止位置を表す意味述語BEで表され，到達は位置変化や状態変化を表すBECOME，活動は継続活動を表すACTまたはACT ON，そして達成はCONTROLを使って表されている[12)]。その意味構造を用いて，（17）のような動詞のCSの基本スキーマを設定し，項構造へのリンキングについて分析している。（17）は影山（1998: 90）が記載した構造図を引用したものであるが，動詞の例や図の下にある意味構造については，影山の分析を基に筆者が加筆し，まとめたものである。

（17）使役構造の雛形



(17)の上位事象とは，使役事象のことであり，使役作用となる活動を表す。一方，下位事象は結果事象を表し，上位事象で示された使役作用を受け，何らかの状態変化がもたらされるという結果を示す。(17) の右側に示されるように，下位事象に当てはまるのは状態動詞や到達動詞である。これは人間や外的原因が関与しない自然発生的な出来事または状態を表すため，非対格構造に対応する。(17) の左側にある上位事象には活動動詞が入る。これは，意図的な活動を表し，多くの場合，動作主によって実行されるため，非能格構造に該当する。最後に，達成動詞は上位事象と下位事象を組み合わせたもので，使役を表す。従って，達成動詞の意味構造は非能格動詞と非対格動詞をCONTROLで繋げた構造となり，[EVENT x ACT (ON y)] CONTROL [BECOME [y BE [LOC AT z]]]と表示される。達成動詞に含まれる能格動詞は [x=y CONTROL [BECOME [y BE [LOC AT z]]]と表示され，能格構造となる[13]。

（17）で示されるように，動詞構文の中には上位事象のみで成立されるものもあれば，下位事象のみで形成されるもの，そして上位事象も下位事象も両方とも必要な構文もある。影山（1998）は以上のCSの基本形を設定し，このスキーマを用いて様々な動詞構文を分析している。

2.2.2.　結果構文の意味構造

影山（1998）は結果構文の意味構造に見られる「上位事象と下位事象の合成」という概念についても大きく取り挙げている。これは中間構文の分析にも関連があるため，簡単に説明する。

結果構文（resultative construction）とは行

為と結果を表す構文であり，次のような文が見られる。

（18）John kicked the door open.

（影山（1998: 254））

（18）は「Johnがドアを蹴ったため，そのドアが開いた」ということを表す。形容詞*open*は結果述語（resultative predicates）と呼ばれ，動詞が示す行為の結果，その目的語がどうなったのかという状態を叙述する。このような動詞構文には，（19）のような「上位事象と下位事象の合成」が必要だと影山は述べ，同時に（18）の結果構文の意味構造を以下のように示している。

（19）上位事象と下位事象の合成

上位事象（ACT ON ないしACT）と下位事象（BECOME [BE AT]）を使役関係（CAUSE）で結び付けよ。

[x ACT ON y] + [y BECOME [y BE AT-z]]

→[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]]

John kicked　　the door open

（影山（1998: 253））

（19）より，外項を表す x が主語 *John* に，働きかけを表すACT ONが主動詞 *kicked* に，内項を表す y が目的語 *the door* に，そしてAT-zが結果述語の*open*にリンクされている。（18）は‘The door got open because John kicked it.’と言い換えることができるため，上位事象と下位事象を結びつけるものはCAUSEである[14]。

このように，結果構文が派生されると分析されている。以上の影山（1998）の分析を踏まえ，次節で中間構文について概観する。

2.2.3.　影山（1998）による中間構文の語彙概念構造の分析

中間構文は行為者の視点から結果状態を注視するというパターンの1つであると分析されている。まず，中間構文を形成する動詞と形成できない動詞について影山（1998）は次のように述べている。（20a）のような状態変化他動詞の中間構文は成立するが，（20b）の状態動詞や（20c）の接触・打撃動詞は中間構文を許可しない。

（20）a.　Small cars sell well.

b. *The answer knows easily.

c. *This soccer ball kicks well.

（影山（1998: 276））

（20a）のような状態変化他動詞は中間構文に納まる動詞の典型であり，意味的に動作主が必要とされるものである。（20b）のような状態動詞は対象物の状態変化を含まないものである。但し，（20c）のような接触・打撃動詞に関しては結果述語を補うことにより，中間構文が可能になる。その例が（21）で示されている。

（21）a.　This counter wipes clean quickly.

b. *This counter wipes quickly.

（影山（1998: 277））

wipe のような働きかけの動詞は通常（21b）が示すとおり，基本的な中間構文として成立しないが，（21a）のように結果述語*clean*を加えると文法的に正しい中間構文が成立する。

以上の事実観察より，中間構文が可能になるのはCSにおいて上位事象から下位事象に作用の連鎖，つまり，行為から結果への働きかけの連鎖がつながっている時に限られるのではないかと影山（1998: 277）は考える。そして中間構文を「CSにおける項から項へのリンク」という概念を用いて，他の構文と比較している。比較対象の構文は完了形容詞と

能格構文である[15)]。中間構文におけるCSの行為から変化までの働きかけのリンクが広大であると予想されている。（22）の外項 x や内項 y を結んでいるものは「働きかけのリンク」を表す。

（22）a. 完了形容詞　fallen bottle

… [y BECOME [y BE AT-z]]

b. 能格構文　The door opened.

y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]

c. 中間構文

[x ACT-ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]

（影山（1998: 277））

完了形容詞は（22a）が示すように，働きかけのリンクが最短である。（22b）の能格構文は完了形容詞よりもリンクが長くなる。中間構文は（22c）のように働きかけのリンクが最も長くなる。この3つの構文における働きかけのリンクの長さの違いには，歴史的な発達の古さが反映されているのではないかと影山は分析している。完了形容詞は古英語（Old English，OE）の時代から見られ，能格構文は中英語（Middle English，ME）の時代，中間構文は中英語よりも後の比較的新しい時代に生まれたため，働きかけのリンクの長さが歴史的な発達の古さに関連していると考えられる。

上述のような行為から変化までの働きかけの連鎖という概念を用いて，中間構文が分析されている。中間構文にはその働きかけのリンクが必要であるということが次のような文の対比により例証されている。

（23）a. This piano plays easily.

[x ACT-ON piano] CAUSE [y BECOME [sound BE FROM piano]]

b. *This sonata plays easily.

[x ACT-ON piano] CAUSE [BECOME [sonata BE FROM piano]]

（影山（1998: 278））

（23a）は「xにあたる演奏者がピアノの鍵盤をたたき，それによってyのピアノから音が出る」という連鎖を示すことができるため，中間構文として認可される。ところが，（23a）の主語 *This piano*を*This sonata*に置き換えると，（23b）のように非文法的な文となる。（23b）の意味構造は「xにあたる誰かがピアノを弾き，その結果，ソナタがピアノになる」ということを表し，容認されない。そのため，働きかけのリンクがつながらず，中間構文が成立しない。これは作成・生産動詞*make*と同様，BECOMEの項が欠如しているためである。作成・生産動詞*make*のCSは（24）のように示され，（23b）のCSと同じである。

（24）He made an error.　*An error made.

（影山（1998: 161））

x CONTROL [BECOME [y BE AT-z]]

（影山（1998: 162））

（24）が示すように，BECOMEの項が欠如しているため，作成・生産動詞 *make* のCSに働きかけの連鎖が見られない。新しいものを作成するという場合，その新しいものが自ら出現することはない。*make*などの作成動詞は行為から結果へのリンクがつながらないため，（25）のように中間構文を形成することができない。

（25）*This kind of error makes easily.

（影山（1998: 277））

これより，中間構文のCSには行為から結果への働きかけのリンクが必要である。また，料理に関する作成動詞のCSにも，（24）の動詞*make*のCSと同じ作用が見られ，中間構文の働きかけのリンクと関連がある。動詞*bake*

を例に考える。

（26）a. She baked the potatoes. The potatoes baked.

b. She baked a cake. *A cake baked.

（影山（1998: 161））

（26a）と（26b）の左側の例はいずれも動詞*bake*を他動詞用法として表されたものであり，右側は動詞を自動詞化したものである。（26a）の自動詞化が認められる理由として，名詞句 *the potatoes* が材料であり，すでに存在するものであることが挙げられる。一方，（26b）の自動詞化が認められないのは，名詞句 *a cake* がすでに存在するものではなく，作成されなければ出現されないものであるからということである。つまり，（26a）は状態変化を表し，（26b）は作成を表す。状態変化は中間構文を可能にする動詞の典型であるため，（26）のような現象を中間構文の分析に関連づけている。

以上のように，影山（1998）は中間構文についてCSを用いて説明し，行為から結果状態への働きかけの連鎖がつながらなければならない構文であると考えられている。但し，（17）の動詞の種類の中で中間動詞がどれに最も近いのかということは明確に述べられていない。

2.3. Randall（2010）による中間動詞の語彙概念構造の分析

2.2節の影山（1998）のように，Randall（2010）も語彙概念構造を用いて様々な動詞構文や形態的現象を分析している。同書は，語彙概念構造（以下，CS）の連結節点が統語の最終節点に同一構造上配置されるというIsomorphic Linking Hypothesis（ILH）を提唱し，統語と項構造，意味構造のつながりについて述べている。この研究では中間構文について比較的詳しく分析されている。以下，例文（27）を使ってRandall（2010）の中間構文の分析を概観する。

（27）That article reads easily.

（Randall（2010: 47））

中間構文を形成するMiddle Formation（以下，MF）は，（28）のように定義され，以下にその生成過程を図示する。

（28）Middle Formation（MF）

動詞の外項を抑制せよ。次に，直接的内項を外在化せよ。

AS of active verb: a [a]

↓ MF

AS of middle verb: [a]

↓ lexical insertion

D-structure: [NP] reads[-acc] [NP that article] easily

↓

S-structure: [that article] reads[-acc] [NP *t*] easily

（Randall（2010: 50））

（28）の図中にあるASとは argument structure（項構造）のことである。まず，active verb（能動動詞）に MFを適用し，外項 a を削除する。この操作はlexiconで行われる。次に，middle verb（中間動詞）のASの内項[a]に単語を挿入し，D-structureで[NP] reads [NP that article] easilyとなる。D-structureにある直接的内項[NP that article]を外在化させ，S-structure で *That article reads easily* という中間構文が生成される。この操作は syntax で行われる。

（28）の定義を仮定すると，中間構文（27）のDS，AS，CSの結合関係は，（29）のようになる。

（29）read（middle）

DS: [NP]　reads　[NP this article] easily

AS: [　a　]

CS:[STATE BE（[EVENT CAUSE（x，[BECOME（(y),[PLACE AT[PLACE <IN MIND>]]）]），[PLACE <EASY>]）]

CS inherited from active *read*

（Randall（2010: 122））

(29)より，themeを表すCSのyは内項[a]に，さらにDSで[NP this article]にリンクされる。ASの外項はリンクされず，DSの外項は空の状態となり，動詞 *read* は[NP this article]に格を与えることができない。音形を持つ名詞句は必ず動詞から格を受け取らなければならないという格フィルターの理論に従い，[NP this article]は格を受け取るために移動する。MFによって新しく表示されるCSの意味範疇はSTATEと示され，中間構文は状態を表す。この新しく形成されたCSは，「誰かがこの記事を読むことは簡単である」ということを表す[16]。また，（29）のCS部分に“CS inherited from active *read*”と記載されているが，これは能動動詞 *read* のCSを表し，中間構文が形成される上で，その能動動詞の意味構造がそのまま中間構文の意味構造に反映されるということを示している。このようにして，中間構文に見られる意味構造，項構造，及び統語構造は規則的にリンクされる。

2.4.　まとめ

本節で扱った中間構文に関する先行研究のポイント，主に，中間構文の語彙概念構造の分析を通して明らかにされていることをここでまとめる。中間構文の重要な特徴は5つある。

まず，2.1節で取り挙げた多くの研究より中間構文は能格構文と受動構文に似ていると言われてきたが，2.2節の影山（1998）のように語彙概念構造を分析すると，結果構文にも関連しているということが特徴として挙げられる。実際，2.2.2節の（18）で表した結果構文のCSと2.2.3節の（22c）で示した中間構文のCSがよく似ているということをポイントとして押さえたい。2つ目は，中間構文はimplicit agentを持つということであり，2.2節の影山（1998）と2.3節のRandall（2010）がそれぞれ示したCSにもimplicit agentが含意されているということがわかる。3つ目は，中間構文はstativeであるということである。この点については，2.1節のFagan（1988）やGarcía de la Maza（2011）が主張していたが，Randall（2010）の中間構文のCSでSTATEと表示されていたため，その構文が状態を表すということが顕著である。

4つ目は状態変化他動詞の中間構文は成立するが，状態動詞や接触・打撃動詞の中間構文は成立しないということである。但し，接触・打撃動詞に関しては結果述語を補うことにより，中間構文として文が成立する。これは2.2節の影山（1998）が明らかにしている。

5つ目に，中間構文はlexiconとsyntaxの両方で派生されるということが挙げられる。2.1.3節で取り挙げたように，中間構文はsyntaxで派生されるというKeyser and Roeper

（1984）の考えと同表現はlexiconで派生されるというFagan（1988）の考えが対立関係にあり，どちらが適当かどうか明らかではない。しかし，2.3節のRandall（2010）の分析により，まず lexiconで派生され，syntaxで派生されるという過程が見られることがわかる。

しかしながら，一連の先行研究を調査してく中で，中間構文について明らかでない点が幾つかある。1つ目は，中間構文には通常副詞と共起するが，副詞が現れなくても良いものも見られる。2.2節の影山（1998）が表示したCSと2.3節のRandall（2010）が表示したCSを比較すると，副詞に関して意味構造に違いがある。影山（1998）は（22c）のようにCSの中で副詞に該当する意味構造を表記しないが，一方Randall（2010）は（29）で示すように副詞 *easily* を[PLACE <EASY>]としてCSで表記している。中間構文に副詞が含まれるということは典型的な特徴として分析されているが，研究者によってCSの表示が異なるため，副詞に関してはまだ明確にできていない点も見られる。2つ目は中間動詞がどの意味構造に最も近いのかということである。よく比較されていた能格構文のCSは，2.2.3節の（22b）のように分析され，（22c）のような中間構文のCSと意味構造が似ているとは言えない。先でも述べたが，意味構造のみに着目すると中間構文は結果構文の意味構造によく似ている。また中間構文は2.2.1節で示した（17）の動詞の種類の中でどれに当てはまるのかということが明らかにされていないため，今後検証すべき点であると思われる。

3.　先行分析の問題点と提案

前節でまとめた先行研究より，語彙概念構造の分析を通して中間構文には様々な特徴があることがわかる。本節では，その特徴について4つの問題点と提案を挙げる。まず3.1節で，中間構文は stative であるという特徴について問題点を述べる。3.2節では接触・打撃動詞の中間構文と結果述語についての問題点を挙げ，3.3節では中間構文と比較すべき構文についての筆者の意見を提示する。最後に3.4節では影山（1998）が示したCSに関する問題点を述べる。3.2節，3.3節，3.4節では，British National Corpus（BNC）と呼ばれる1億語の大規模コーパスで中間構文やその関連の表現を収集し，そのデータを用いて先行研究の見解を検証する。

3.1.　Stativeness

2.1.2節で扱ったFagan（1988）やGarcía de la Maza（2011），2.3節で概観したRandall（2010）のCSが示すように，中間構文はstate（状態）重視の表現である。例えば，次のような文が見られる。

（30）This jumper washes well.

（García de la Maza（2011: 165））

（30）は「サイズ，素材，色など様々なジャンパーの中で, このジャンパーは洗いやすい」ということを示す時に使われる表現である。この文は主語である *This jumper* の特徴，すなわち，ジャンパーの状態について言及している。一方，単独で状態動詞が用いられている場合は中間構文を形成することができない。

（31）*The answer knows easily.

（Keyser and Roeper（1984: 383））

（31）で示されるように，状態動詞の *know* は中間構文になることができない。なぜこのような事実になるのかということについて説明が求められる。

3.2.　接触・打撃動詞の中間構文と結果述語

影山（1998）の分析によると，（32）が示すように接触・打撃動詞は結果述語を補った

場合のみ，中間構文が可能になる。

（32）Elephants don’t kick senseless easily.
（影山（1998: 277））

この点を検証するために，大規模コーパスBNCで（32）に関連する動詞を検索したところ，関連する構文は見出されなかった。検索した動詞は*hit, slap, strike, kick, touch, wipe*の6種類である。従って，接触・打撃動詞と結果述語で形成された中間構文の可否を確認するためには，インフォーマントチェックの実施が求められる。

3.3.　中間構文と比較すべき構文

先行研究より，中間構文は能格構文や受動構文，結果構文と関連があるということが明らかにされている。この節では，中間構文と比較すべき構文について先行研究の問題点と提案を述べるが，その前に影山（1998）による能格動詞と非対格動詞の比較分析について取り挙げる。

能格動詞と非対格動詞も自動詞の1種であるが，以下の例文のように，違いが見られる。（33）が能格動詞の例であり，（34）が非対格動詞の例である。

（33）a. The door opened.
b. He opened the door.
（影山（1998: 140））

（34）a.　A traffic accident happened.
b. *The driver happened a traffic accident.
（影山（1998: 140））

（33）の *open* のような能格動詞は自他両用の自動詞であるが，一方（34）の *happen* のような非対格動詞は自動詞用法しか見られない。影山（1998: 148-156）は能格動詞と非対格動詞の違いを反映する言語現象について記述し，様々な動詞が能格なのか，あるいは非対格なのかを確認するためのテストを挙げている。この影山（1998）の記述を（35）の表にまとめた。

（35）　能格動詞と非対格動詞の違いを反映する言語現象 I

	能格動詞	非対格動詞
i）再帰目的語	This door opens *itself.*（影山（1998: 149））	*A traffic accident happened *itself.*（影山（1998: 149））
ii）難易副詞	The glass broke *without any effort.*（影山（1998: 150））	*A lot of accidents happened *without any effort.*（影山（1998: 150））
iii）*all by itself*	The ship sank *all by itself.*（影山（1998: 151））	*The accident happened *all by itself.*（影山（1998: 151））
iv）*self*-複合形容詞	a self-opening gate（影山（1998: 153））	*self-occurring（影山（1998: 153））
v）命令形	Sink, boat!（影山（1998: 154））	*Happen, accident!（影山（1998: 154））
vi）*wouldn’t* の解釈	「主語の意志」,「認識判断」の両方。	「認識判断」の意味のみ。

（35）の項目の中に中間構文の分析に当てはまるものが幾つか見られたため，（35）の表に中間動詞の項目を加えた結果を，（36）のようにまとめた。（36）は（35）の表を簡略化し，中間動詞に関しては筆者が先行研究や事実観察を基に加筆したものである。

（36）　能格動詞と非対格動詞の違いを反映する言語現象II

	能格動詞	非対格動詞	中間動詞
i）再帰目的語	OK	*	*?
ii）難易副詞	OK	*	OK
iii）*all by itself*	OK	*	*
iv）*self*-複合形容詞	OK	*	
v）命令形	OK	*	*
vi）*wouldn’t* の解釈	OK	*	

（36）のi）再帰目的語は（37a）のように中間構文では不可となる。（37b）で例証されているように，ii）難易副詞は中間動詞と共起で

きる。副詞 *easily* は難易副詞の代表例である。さらに iii）*all by itself* は（37c）で示されているように，中間構文では容認されない。そしてv）命令形は中間構文では不可とされていることが（37d）で示されている。

（37）a. *Foreign cars sell *themselves* easily.
（Fiengo（1980: 52））
b. These chairs fold up *easily*.
（Fellbaum（1985: 24））
c. *Bureaucrats bribe easily *all by themselves*.
（Keyser and Roeper（1984: 405））
d. *Bribe easily, bureaucrat!
（Keyser and Roeper（1984: 385））

但し i ）再帰目的語に関しては，（38）が示すように，中間構文に再帰目的語が現れても良いとするものもある。

（38）The subsequent article almost writes *itself*.
（García de la Maza（2011: 175））

（37a）と（38）より，先行研究の中でも考えが異なるため，i ）再帰目的語に対しては“?”を付けた。以上の点が先行研究で明らかになっている。ところが，iv）*self*-複合形容詞と vi）*wouldn't* の解釈については，これまでの先行研究で分析されていない。

そこで本研究で，*self*-複合形容詞についてBNC検索を基に調査した。*self*-複合形容詞をBNCで検索したところ，中間動詞を形成する動詞を活用した *self*-複合形容詞は見つからなかった。しかし，次のような文が見られた。

（39）Barbadians are a proud and *self-respecting* people, and they deserve your respect too.（BNC: FRS）
（40）You can't go on forever just playing with the children and telling *self-deprecating* stories about yourself at the Chases' dinner parties.（BNC: G0F）
（41）The use of groups in the management of *self-poisoning* patients warrants further investigation.（BNC: B30）

（39）から（41）のように，動詞 *respect*, *deprecate*, *poison* は *self*-複合形容詞を形成することができる。そして，これらの動詞を活用した中間構文は見られず，Levin（1993）も上記の3つの動詞を中間構文形成不可の動詞としてリストに挙げている。この事実観察より，中間構文を形成することができない動詞が *self*-複合形容詞を形成し，一方，中間構文を形成することができる中間動詞は *self*-複合形容詞を形成できないということが言える。

以上の分析から，（36）の表を修正し，（42）のようにまとめた。

（42）能格動詞と非対格動詞の違いを反映する言語現象（修正版）

	能格動詞	非対格動詞	中間動詞
i ）再帰目的語	OK	*	*?
ii ）難易副詞	OK	*	OK
iii）*all by itself*	OK	*	*
iv）*self*-複合形容詞	OK	*	*
v ）命令形	OK	*	*
vi）*wouldn't* の解釈	OK	*	

（42）より，ii）難易副詞との共起が認可されるということに関しては，中間動詞は能格動詞と同じ性質を持つということが明らかである。加えて，i ）再帰目的語，iii）*all by itself*, iv）*self*-複合形容詞及び v）命令形の4点については，非対格動詞と中間動詞で類似性が見られる。（42）が示すように，i ）から v）の項目で“*”が多いため，中間動詞は非対格動詞に近いと考えられる。中間構文が vi）*wouldn't* の解釈を受けるか否かについては，今後調査していきたい[17]。

ところが，中間動詞は完全に非対格動詞に近いというわけではなく，能格動詞の要素も

含まれているとも考えられる。（42）のii）難易副詞との共起に関する特徴は，能格動詞と中間動詞の2種類に見られるが，非対格動詞には見られない。加えて，Keyser and Roeper（1984）は，能格ペアの他動詞は中間構文の形成を容認することができると述べている。その例が（43）であり，これは（42）のii）難易副詞と共起できるという特徴を示す。

（43）The door opens easily.

（Keyser and Roeper（1984: 383））

実際，（43）のような文はBNCでもよく見られる。因みに，Keyser and Roeper（1984）によると，native speakerにとっても中間構文と能格構文の違いが曖昧である。

本節では，主に*self*-複合形容詞の分析を用いて，中間動詞が能格動詞と非対格動詞のどちらに近いのかを検証した。その結果，中間構文には非対格動詞の要素が含まれていると考えられる。中間構文に似ている動詞構文としては，能格構文や受動構文，結果構文だけでなく，非対格構文も関連していると考えるべきであるということが本研究で解明した。

3.4.　影山（1998）が表示した中間構文のCS

2.2.3節では，影山が表示した中間構文のCSについて概観した。「CSにおける項から項へのリンク」という概念を用いて，中間構文が成立するのは行為から結果への働きかけの連鎖がつながっている時に限られると影山（1998）は考察する。加えて，（44＝（22））のように他の構文と比較すると，中間構文のCSに見られる働きかけのリンクが長いということが述べられている。これは，働きかけのリンクの長さが歴史的な発達の古さに関連していると説明され，中間構文は中英語よりも比較的新しい時代に出現したと分析されている。

（44）a. 完了形容詞　fallen bottle

… [y BECOME [y BE AT-z]]

b. 能格構文　The door opened.

y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]

c. 中間構文

[x ACT-ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]

（影山（1998: 277））

ところが柘植（2017b）の分析を用いると，中間構文は新しい時代に生まれた構文だと言うことができない。同研究ではVisser（1984）の通時的分析を発展させている。能動受動態（activo-passives）としての中間構文を通時的に分析したVisser（1984）によると，同表現にはquasi-copulaの1種として機能するもの，副詞が含まれないもの，副詞と共起するもの，*will*（*not*）/ *would*（*not*）と共起するものという4種類の特徴がある[18)]。Visser（1984）はどのような動詞でそのような特徴が見られるのかを分析しているが，その動詞と例文をリストしているだけである。そのため，柘植（2017b: 14-15）はVisser（1984: 154-159）が挙げている中間動詞を年代ごとに集計し，4つのタイプの動詞を年代ごとに集計し，その歴史上の分布をまとめている。本稿では，その歴史的分布状況のみを引用する。

（45）Visser（1984）による4種類の中間構文の歴史的分布状況

	OE	ME	ModE		PE
			EModE	LModE	
	（～ 1150）	（1150 ～ 1500）	（1500 ～ 1700）	（1700 ～ 1900）	（1900 ～）
① quasi-copulas		←	―	→	
② 副詞との共起なし	←	―	―	―	→
③ 副詞との共起あり			←	―	→
④ *will*（*not*）, *would*（*not*）との共起			←	→	

（柘植（2017b: 15））

（45）で示すように，歴史的普及状況を調査すると，中間構文は古英語時代（OE）の頃から見られ，古くから使われていた構文である[19]。従って，中間構文のCSに見られる行為から結果への働きかけの連鎖が長いのは，中間構文が比較的新しい時代に生まれたためであるという影山（1998）の説明では不十分であると思われる。

先に見たように，中間構文には行為から変化までの働きかけのリンクが必要であるということが動詞*play*を用いた構文の対比により例証されている。（23）のCSを（46）で再度示す。

（46）a. This piano plays easily.

[x ACT-ON piano] CAUSE [y BECOME [sound BE FROM piano]]

b. *This sonata plays easily.

[x ACT-ON piano] CAUSE [BECOME [sonata BE FROM piano]]

（影山（1998: 278））

（46a）の主語 *This piano* を *This sonata* に置き換えると，（46b）のように非文法的な文となる。（46b）にはBECOMEの項が欠如するため，働きかけのリンクがつながらず，中間構文が成立しないと説明されていた。さらに，作成動詞と関連させ，（46a）は状態変化と関連し，「x にあたる演奏者がピアノの鍵盤をたたき，それによって y のピアノから音が出る」という意味を表すが，一方（46b）は「ソナタが奏でられる」という作成を表すと述べられている。加えて，影山（1998）は状態変化動詞が中間構文を可能にする動詞の典型であると分析している。

ところが，動詞 *play* の中間構文をBNCで検索したところ，以下の文が見られる。

（47）*Tenor sax and guitar played well* together and in their many solos.　（BNC: K4Y）

（48）*Simple music played well* and that really leads the class is infinitely more desirable than elaborate music that goes astray.　（BNC: HX8）

（47）は（46a）と同様，主語が楽器を表す名詞句 *Tenor sax and guitar* であり，このような中間構文は受け入れ可能である。ところが，（46b）の主語は曲や音などを表す名詞句 *This sonata* で表され，このような名詞句が含まれる中間構文は影山（1998）の分析では非文法的な文とされていたにも関わらず，（48）のように曲や音などを表す名詞句 *Simple music* が中間構文の主語でも受け入れ可能になるとされる。その他にも作成を表す中間構文が成立しないという分析に反する文が見られる。

（49）*Site &; soil Sweet peppers crop well in growing bags*, planting 3 per bag, or can be grown singly in 9 in pots of potting compost.　（BNC: A0G）

(49) は「作物がよく収穫される」ということを表し，「育てた結果，*Site &; soil Sweet peppers* が生み出され，収穫される」ということが含意される。従って，状態変化を表す場合は中間構文が成立し，作成を表す場合は中間構文が成立しないという説明は，この点で不十分であると考えられる。

上記の事実より，(46) で示されたCSでは中間構文について十分に説明できないため，当該表現を可能とするために何らかの修正を必要とする。影山 (1998) が示したCSをどのように修正すれば，説明ができるのかどうかを今後の課題としたい。

4.　結び

中間構文の語彙概念構造を観察した結果，中間構文は能格構文や受動構文に似ているという特徴だけでなく，結果構文の要素も含まれるということが考えられる。加えて，BNC検索による事実観察を行ったところ，中間構文は非対格構文にも似ているということも1つの特徴として挙げられる。従って，中間構文は能格構文と受動構文，結果構文，非対格構文を混成 (blend) させた構文である。しかし，中間構文の特徴について明らかにできていない点が残されている。

中間構文が様々な動詞構文を blend して形成されたならば，どんな順序で能格構文や受動構文，結果構文，非対格構文が blend されたのかを通時的に分析することを今後の課題とする。また，中間構文の特徴を2.2.1節の (17) を使って説明できるように徹底的に分析したい。そして，影山が示したCSをどのように修正すれば説明がつくのかどうかということも検証したい。先行研究によると，中間構文の意味構造の表示方法は様々であるため，その意味構造をどのように表せば良いのかということについて，今後もさらに例文を収集しながら，意味構造を特定させたい。

注

1）2.1節で扱う先行研究は，柘植 (2017a) と柘植 (2017b) で取り挙げた一連の先行分析を統合してまとめたものである。

2）能格構文と受動構文は本来他動詞の目的語であるべき要素が自動詞の主語となり，他動詞が自動詞に交替して生じる構文である。双方の構文ともeventを示す。

3）Jespersen (1949) は中間構文をactivo-passives（能動受動態）と呼び，通時的分析を行っている。能動形の動詞に受動態の意味が含まれているという特性を持つということから，actico-passivesと名付けられた。この名が示すように，中間構文を通時的に見ても受動構文の要素が含まれているということが明らかである。

4）空西 (1954) もJespersen (1949) と同様，中間構文をactivo-passivesとして分析している。ところが，(i) のactivo-passivesは (ii) の受動構文を連想するというよりも，“The book sells…” というそのままの姿から意味を汲み取ることができると空西 (1954) は説明する。

(i) The book sells well.（空西 (1954: 44)）

(ii) The book is sold well.

（空西 (1954: 44)）

まず，(i) の動詞 *sells* は売買の「売」に相当するようなものであり，*to sell*, *selling* という準動詞にも匹敵すべき動詞の動作そのものを表す。加えて，「誰が」「何を」売るのかを問わず，「売る」「売られる」のどちらなのかということも問わないという。名詞句 *the book*を加え，動詞 *sell* は述語動詞となり，(i) は擬人法表現の1種であると空西は分析している。

5）agentの存在については，中間構文と能格構文，受動構文で相違点が見られる。Keyser and Roeper（1984: 402）によると，能格構文のagentは元々存在するが，ergative formationにより後で削除されるという。一方，受動構文のagentは*by police*のように *by* 句で示されることもあるため，agentは任意で現れる。

6）その他にも，中間構文で使われることができない副詞として“moral”adverbが挙げられる。これは行動している誰かの精神的な気持ちや考えを表すものであり，*accidentally*や*intentionally*などがその種に属する。

（i）*This paint sprays on intentionally.
（Fellbaum（1985: 26））

moral adverbも（6）で取り挙げた“positing a certain trait in the agent”adverbと同様，agent指向の副詞である。

7）Fagan（1988）によると，中間構文は（i）のように進行形の文で起こることもあるが，そこで使われる動詞は事象を表す動詞としては考えられず，状態動詞と同様の性質を持つ。

（i）Bureaucrats are bribing more than ever in Reagan’s second term.
（Fagan（1988: 182））

柘植（2017a）の分析もFagan（1988）と同様，BNCで中間構文を検索した結果，ほとんどが単純現在形の文で現れるが，（ii）のように中間構文の進行形の文が見られる。

（ii）Country properties were not selling well at the time.　（柘植（2017a: 18））

García de la Maza（2011）も中間構文は基本的には事象を示さない構文であるが，（iii）のようにeventive解釈を持つものも存在すると述べている。

（iii）This book translated really easily.
（García de la Maza（2011: 169））

8）主語の特性の読みに関しては，（10）の例より中間構文には通常副詞が含まれるという特徴と関連していると考えられる。

9）Visser（1984: 153）の通時的分析によると，副詞と共起しない中間構文が先に形成され，副詞と共起する表現が現れるようになったという。

10）2.3節で取り扱うRandall（2010）も語彙概念構造をCSと示し，同じものを表しているという点より，本稿では語彙概念構造をCSとして表記している。

11）Vendler（1957: 145-147）によると，状態動詞とは時間的な制限に縛られない恒常的な状態を表すものであり，動詞 *believe, have, know* などが当てはまる。2つ目の到達動詞とは何らかの目標（状態）に至るという行為の終了点を重点的に述べるもののことであり，*die, find, reach* などの動詞を指す。3つ目の活動動詞とは意図的に開始したり終了できる行為を表すものであり，動詞 *run, walk, push a cart* の *push* がその種に属する。そして，達成動詞とは何らかの活動の結果，最終的な目標（状態）に至ることを意味し，*paint a picture* や *push a cart to the supermarket* というような表現がこの種に入る。

12）意味述語とは意味構造で表示され，統語では現れない架空の動詞である。

13）能格動詞の意味構造である[x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]の *x=y* は他動詞から自動詞への態転換の操作を表し，この作用は反使役化と呼ばれる。反使役化とは，対象物 *y* と使役主 *x* が同定することにより自動詞化を行うと

いうものである。

14）結果構文の意味構造に含まれる上位事象と下位事象を結びつけるものはCAUSEではなくCONTROLである可能性も残っていると影山（1998: 254）は述べている。しかし，なぜCONTROLの可能性があるのかという理由については詳しく書かれていない。CAUSEとCONTROLがほぼ同等のものであるかのように記述されているが，影山は結果構文の意味構造にCAUSEを使用している。

15）完了形容詞はCSの中で行為または状態変化から生じる結果状態に焦点を当てる表現の1つとして，影山（1998）の分析で取り挙げられている。例えば，*fallen bottle* の *fallen* や *wilted lettuce* の *wilted*が完了形容詞である。

16）動詞 *read* のCSの後半部にある[PLACE <IN MIND>]は，「読むという行為をすることでthemeが主語の心に入る」という意味で表示されている。

17）中間動詞をBNCで検索したところ，助動詞 *wouldn't* との共起はほとんど見られない。さらに，影山（1998）も*wouldn't*の解釈について詳しく説明していないため，主語の意志の意味なのか認識判断の意味なのかが判断できない。しかし，*This book sells well* という中間構文に *wouldn't* を加えた文は「この本はよく売れないだろう」となり，どちらかと言えば認識判断の意味に近いと考えられる。

18）quasi-copulaとは*We made the boy leader of the group*のようなSVOCの第5文型を示すことができるような動詞を表す。例えば（i）のように，動詞 *fell* や *taste* などが該当する。

（i）a. The air felt chilly.（Visser（1984: 154））
b. The milk taste sour.（Visser（1984: 153））

19）Visser（1984）の通時的分析によると，（45）の①から④が示すように，中間構文の4種類の性質が出現する時期が異なる。この①から④の出現の違いがあるのはなぜかということを今後分析したい。加えて，中間構文の典型的な性質である③が出現するのは，（45）によると近代英語（Modern English，ModE）の時代であるため，同表現が近年に出現したものであると考えられる可能性もある。ところが，中間動詞の後に副詞が続かない場合も中間構文として考えられるという従来の分析もあるため，本研究では副詞と共起しない表現も含め，中間構文は古くから使われると仮定する。

参照文献

Fagan, Sarah M. B.（1988）“The English Middle,” *Linguistic Inquiry* 19, 181-203.

Fellbaum Christiane（1985）“Adverbs in Agentless Actives and Passives,” *CLS* 21, Part 2, 21-31.

Fiengo, Robert（1980）*Surface Structure: The interface of autonomous components*, Harvard University Press, Cambridge, MA.

García de la Maza, Casilda（2011）“The semantics of English middles and pseudo-middles,” in Pilar Guerrero Medina（ed.）, *Morphosyntactic Alternations in English*, Equinox, London.

Jespersen, Otto（1949）*A Modern English Grammar on Historical Principles* Part III, George Allen and Unwin, London.

影山太郎（1998）『動詞意味論―言語と認知の接点』　くろしお出版　東京 .

萱原雅弘（2006）「中間構文に関する通時的考察」『東京家政学院大学紀要』第 46 号 , 73-82.

Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper（1984）“On the Middle and Ergative Constructions in English,” *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.

Levin, Beth（1993）*English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, The

University of Chicago Press, Chicago.
Marelj, Marijana（2004）*Middles and Argument Structure across Language*, Ph.D. dissertation, Netherlands Graduate School of Linguistics.
Randall, Janet H.（2010）*Linking: The Geometry of Argument Structure*, Springer, London.
空西哲郎（1954）『英文法シリーズ第 10 巻　動詞―種類と語形変化―』　研究社　東京 .
Stroik, Thomas（1992）"Middles and Movement," *Linguistic Inquiry* 23, 127-137.
柘植美波（2017a）「英語の中間構文―先行研究とその問題点―」『金城学院大学大学院文学研究科論集』23, 1-28.
柘植美波（2017b）「能動受動態としての中間構文の通時的分析―先行分析とその問題点―」*LILIUM* Vol. 21, 1-21.
Vendler, Zeno（1957）"Verbs and Times," *The Philosophical Review* 66, No. 2, 143-160.
Visser, Fredericus Theodorus（1984）*An Historical Syntax of the English Language* Part 1, E. J. Brill, Leiden.